

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：33918

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04578

研究課題名(和文) 看護系大学における慢性疾患の学生の支援体制構築の検討

研究課題名(英文) Study on support system for students with chronic illness at nursing universities

研究代表者

河合 洋子 (KAWAI, Yoko)

日本福祉大学・看護学部・教授

研究者番号：10249344

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は、看護系大学における慢性疾患学生の学習環境を整えることを目的とする。看護系大学250校を対象とした慢性疾患学生の支援体制の調査では、支援体制は6割以上が整っていた。授業での慢性疾患学生への対応は、発作等緊急事の対応や患者に及ぼす危険があると予測される場合に予め対象患者を選定されていた。学生の支援では情報を共有・活用すること、学生が病気を自己管理できる支援の必要性が明らかになった。5大学に学生支援体制についての聞き取り調査を行った。全大学では学生支援センターがあり保健管理部門と学生相談部門があった。調査から慢性疾患学生の支援では、保健管理部門が重要な役割を担っていることが分かった。

研究成果の概要(英文)：The present study aimed to create a learning environment for students with chronic illness at nursing universities. 1) Around 250 nursing universities were surveyed in terms of their support system for students with chronic illness, and it was found that over 60% of universities had such support systems in place. During lectures, the management of emergencies, such as seizures, and the advanced selection of the patient in the students' care in the event of dangers affecting a patient were developed. To support students, it is important to share and make use of student information and provide assistance that enables students to independently manage their illness. 2) Five universities were surveyed by hearing with regard to their student support systems. All universities were centralized of student support, with a healthcare services and student counseling services. It was found that health administration office played a significant role in the support of students with chronic illness.

研究分野：小児看護学

キーワード：慢性疾患学生 看護系大学 学生支援体制 看護学実習 情報の共有と活用 特別支援教育 病弱児

1. 研究開始当初の背景

2007年より特別支援教育体制の整備及び取組みが行われ、大学等の高等教育機関においても環境の整備が進められた。2013年度の日本学生支援機構(以下、JASSO)の修学支援の調査では、病弱・虚弱の学生割合が22.3%と年々増加しており、障害種別で最も多くなっている。また同様に、保健系大学に進む学生も急増しているのが現状である(18.3% : 2008 29.4% : 2012、JASSO)。一方、看護系大学は1991年の11校から240校余に急増して入学生の門戸は広がったが、入学者の志望理由も変化している。看護師を目指す理由が、資格取得や経済的な理由も多く、家族からの勧めで入学した学生も多い。したがって、必須科目である看護学実習は、環境の違いや対人関係、時間外学習等が心身のストレスとなり、修学が困難になる学生も存在している。以上から、慢性疾患の学生が大学生活を送るうえで実習施設など学外との連携、支援体制の構築は、学生一人一人に応じたきめ細やかな支援につながり、学生が安全で安心した学生生活を送ることにつながる。

2. 研究の目的

この研究は、看護学実習を伴う看護師等の専門職業人の養成課程において、慢性疾患の学生の安全な学習環境を整えることを目的とする。慢性疾患を含む学生の学内外の支援体制についての実態調査を行い、現状を把握する。私立大学の学生支援体制について調査し、慢性疾患の学生の支援体制のあり方について検討する。

3. 研究の方法

(1)2015年11月、日本看護系大学協議会会員校名簿に記された看護系大学250校を対象に郵送法による自記式質問紙調査を実施した。質問の内容は、慢性疾患の学生の実情、学生の病気・治療等に関する情報共有の状況、学生支援で困難と感じていることや必要なことについてである。選択式の回答は単純集計し、自由記述はその意味内容の類似性によりカテゴリー化した。本研究は宝塚大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

(2)実習のある学部を持つ私立大学を対象として、学生支援センターの担当職員を対象に2016年12月から2017年6月に聞き取り調査を行った。ホームページで情報を収集し、その情報の確認と不足の情報を聞き取りで補う方法とした(60分から90分程度)。内容は、学生支援体制、障害種別対象とその状況、支援内容と特徴、病気・治療に関する学生の情報共有についてなどである。分析方法は、聞き取り調査した内容について各大学に内容確認を得た後、項目ごとに比較検討した。スーパーバイザーの指導を得た。倫理的配慮として調査に対する説明と同意(所管部署か

ら承諾書)を得た。

4. 研究成果

(1)質問紙調査

2015年度に全国の看護系学科を標榜する国公私立大学250校に配布し、合計90校の回答を得た(回収率36%)。内訳は、国立20校、公立20校、私立50校であった。学部数は、1学部27校が最も多く、2~3学部26校、4~6学部21校、7学部以上15校、無回答1校であった。学部学科は、看護学部看護学科が44校で約半数であり、医学部看護学科/保健学科等21校、保健系学部看護学科17校、その他8校であった。大学の支援体制は、学生支援担当部署が設置されている大学は56.7%、学部委員会の設置は61.1%で約6割は支援体制があった。在籍する慢性疾患の学生は1~4名51.1%、10名以上は8.9%で、7割以上の大学に慢性疾患学生が在籍していた(表1)。病名は、糖尿病、てんかん、悪性新生物が多いが、表2に記した病気は服薬を必要としたり、下痢や関節症状など目に見えない症状のものであった。

講義、演習における支援内容(複数回答)では、「実技・演習の配慮」が44校(48.9%)と最も多く、次に「休憩室の確保」17校(18.9%)であった。授業外では「健康支援センター(室)との連携」46校(51.1%)、「保護者との連携」40校(44.4%)が多かった。講義において困ったことは、てんかん発作等、突然症状が起こったことであり、対応として応急処置、病院搬送、かかりつけ医や健康支援センター、家族に連絡をしていた。演習では運動制限がある学生に対する困り事が多く、上肢や下肢の障害への対応をしていた。演習は、体を拭いたり洗髪するなどの生活援助や注射などの技術演習であるため、あらかじめ対応策が講じられていることが多かった。例えば椅子を用いて演習中に自分で休むことができる環境を整えるなど、技術演習の種類に応じて授業前に学生と方法を検討し、学生の状況(できること、できないこと)に合わせた配慮がなされていた。

実習での支援内容(複数回答)は「実習指導者との連携」47校(52.2%)と「大学内の保健支援センター/保健室との連携」46校(51.1%)が特に多かった。対応したことで最も多かったのは、てんかんや低血糖による発作、関節への負荷、運動制限や聴覚障害に対することであった。何かあったときにすぐに対応できるように「発作時の主治医へ連絡先の確認」、「補食場所や休憩場所の確保」など、あらかじめ実習指導者と調整を図っていた。次に多かった対応は、手指や足に力が入らず力を入れるケアができない、突然の発作等で対象に危険が及ぶ恐れがある場合を想定し、受け持つ患者をあらかじめ選定することであった。実習では、知りえた学生の状況から実習開始前まで起こりうるリスクを想定した配慮をしていた。また、慢性疾患の

学生支援で困難とと思っていることの自由記述では、『学生の情報の保護と管理が困難』、『自己申告のため対応が困難』、『学生への関りが困難』、『学部・学科の支援体制の整備不足による困難』、『本人・家族の認識不足からくる困難』などがまとめられた。慢性疾患の学生の支援には、大学としての体制が整っていることは重要であるが、学生の情報を保護しつつ学生を守るために情報共有・活用すること、また学生自身が病気をコントロールできるための支援も必要であることがこの調査で明確になった。

表1 慢性疾患の学生の在籍状況

慢性疾患の学生	大学数	(%)
0	16	(17.8)
1-4人	46	(51.1)
5-9人	12	(13.3)
10-14人	5	(5.6)
15-19人	3	(3.3)
無回答	8	(8.9)
合計	90	(100)

表2 慢性疾患の種類とその頻度

慢性疾患の種類(5名以上)	人数
糖尿病	18
てんかん	17
悪性新生物	16
気管支喘息	10
潰瘍性大腸炎	10
SLE	8
橋本病	6
バセドー病	5
関節リウマチ	5

複数回答

(2) 聞き取り調査

実習のある私立大学5大学(A,B,C,D,E)からの結果では、学生支援体制はすべての大学で組織されていた(図1)。またほとんどの大学は学生支援がセンター化されており、保健管理部門、学生相談部門があった。3大学(A・C・D)では障害学生支援部門が存在した。支援メンバーでは、医師、看護師、カウンセラー・臨床心理士、ソーシャルワーカー、コーディネーターが常勤または非常勤で配置されていた。病気の学生は保健管理部門が担当しており、入学時の健康調査票による管理がなされていて、情報の共有はいずれも学生の許可を得たうえで行っていた。学生支援は学生

の自己申請に基づいており、定期的または必要時に開かれる会議で必要な配慮事項を検討していた。実習に関しては、実習センターがある大学は2大学(B・D)で、実習センターが実習施設とやり取りをしていた。残りの3大学(A・C・E)は、実習科目担当または実習のある学科が実習施設や保健管理部門と連携を取っていた。学生支援センターで対応した学生の主な疾患は、白血病、脳腫瘍、心疾患、糖尿病、過敏性腸炎、潰瘍性大腸炎、脊椎疾患、膝関節障害、てんかん、アレルギーなどであった。授業中の支援内容としては、ノートテイク、手話通訳、座席の配慮、試験別室などであるが、慢性疾患の学生の場合は次のような対応も行っていた。人工透析が必要な学生・内分泌疾患の学生の外来受診日の調整、てんかん発作で倒れた学生に対してストレッチャーで移送、通学の配慮、インスリン注射に関する配慮などである。実習に関する配慮では、申請した学生について実習施設を優先的に配置する、実習科目を担当する教員が実習施設に了解を取って学生を配置する、などあらかじめ学生の状況が分かっている場合に対応していた。慢性疾患の学生は身体的な症状が表れるため、症状への対応や連絡は保健管理部門を経由して行われることが多い。この調査から、慢性疾患の学生の支援では保健管理部門が支援において重要な役割を担っていることが明らかになった。

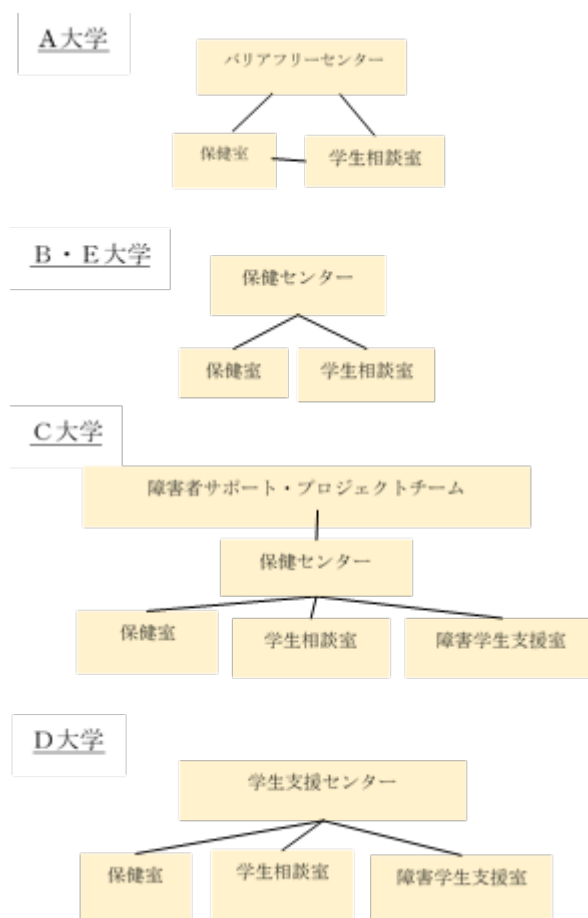


図1 5大学の学生支援体制

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

河合洋子、大見サキ工、合田友美、滝川国芳、看護系大学における慢性疾患の学生の支援体制の実態 - 修学支援のあり方と学生の情報の扱いについての考察 -、育療、査読有、62、2017、22-30.

〔学会発表〕(計5件)

河合洋子、滝川国芳、大見サキ工、合田友美、実習における大学の学生支援体制のあり方の検討、第21回日本育療学会第21回日本育療学会学術集会、2017.8.27、岐阜県岐阜市.

河合洋子、滝川国芳、大見サキ工、合田友美、私立大学の学生支援体制から慢性疾患の学生の支援体制のあり方を考える、第64回日本小児保健協会学術集会、2017.7.1、大阪府大阪市.

Tomomi GODA, Yoko KAWAI, Sakie OMI, Kuniyoshi TAKIGAWA, Actual situation of support for the students with chronic illness at nursing schools in Japan, 2016 Global Human Caring Conference -China Conference Affairs, 2016.10.15, Wuhan, China.

合田友美、河合洋子、大見サキ工、滝川国芳、看護系大学における慢性疾患の学生に対する支援の実態(第1報) - 支援内容に焦点を当てて -、第63回日本小児保健協会学術集会、2016.6.24、埼玉県大宮市.

河合洋子、合田友美、大見サキ工、滝川国芳、看護系大学における慢性疾患の学生に対する支援の実態(第2報) - 学生の情報共有に焦点を当てて -、第63回日本小児保健協会学術集会、2016.6.24、埼玉県大宮市.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河合 洋子 (KAWAI, Yoko)
日本福祉大学・看護学部・教授
研究者番号：10249344

(2) 研究分担者

大見 サキ工 (OMI, Sakie)
岐阜聖徳学園大学・看護学部・教授
研究者番号：40329826

合田 友美 (GODA, Tomomi)
宝塚大学・看護学部・准教授
研究者番号：20342298

滝川 国芳 (TAKIGAWA, Kuniyoshi)
東洋大学・文学部・教授
研究者番号：00443333

(3) 研究協力者

田中 芳則 (TANAKA, Yoshinori)